



佐藤方哉氏 遺影  
(提供 : Dick Malott 氏)

## 佐藤方哉先生 略歴

1932年10月27日	東京府東京市関口台町に生まれる
1945年 3月	東京高等師範学校附属国民学校卒業
1949年 3月	東京教育大学附属中学校卒業
1952年 3月	東京教育大学附属高等学校卒業
1952年 4月	慶應義塾大学医学部予科入学
1953年 4月	慶應義塾大学文学部入学
1957年 3月	慶應義塾大学文学部哲学科心理学専攻卒業
1957年 4月	慶應義塾大学大学院社会学研究科心理学専攻入学
1962年 3月	同 博士課程心理学専攻単位取得満期退学
1960年 4月	慶應義塾大学文学部副手
1962年 4月	同 助手
1965年 4月	同 専任講師
1969年 4月	同 助教授
1976年 4月	同 教授
1987年10月～1991年 9月	同 社会学研究科委員長を兼務
1994年10月～1996年 9月	同 言語文化研究所所長を兼務
1998年 3月	慶應義塾大学を定年退職 名誉教授
1999年 4月	帝京大学文学部教授
2008年 3月	帝京大学を定年退職
2008年 4月	星槎大学共生科学部教授
2009年 4月	同 学長を兼務
2010年 8月23日	逝 去

### 日本動物心理学会役員歴

1967年～1973年	幹 事
1977年～1979年	理 事
1987年～1995年	理 事

## 佐藤方哉先生を偲ぶ

慶應義塾大学 坂上 貴之

佐藤方哉さんが亡くなった。その事故死を知った翌2010年8月24日午前、多くの方がわが耳を疑った。そしてその知らせを伝え聞いた多くの方が絶句した。77歳であった。

奥様である尚子様の喪主としてのお礼の言葉にあったように、賑やかなことの好きだった佐藤さんの葬儀らしく、多くの方がお別れに訪れた。葬儀委員長は佐藤さんの最後の仕事場であった星槎大学がある学校法人国際学園理事長の井上一さんが務められ、弔辞はいずれも日本行動分析学会と深い縁のある山口薫さんと浅野俊夫さんによって格調高く読みあげられた。浅野さんの弔辞は、「慶應では先生という言葉は使わず、佐藤さんと親しく呼ばせていただいたので、ここでもそう呼ばせていただきます」と始まっていた。

佐藤さんのもっとも大きな功績は日本の心理学に行動分析学を本格的に導入し、多くの研究者を育てるとともに、この学の普及と発展に努めたことであろう。彼が学会長を務めた国際行動分析学会や日本行動分析学会はいうまでもなく、日本基礎心理学会でも常務理事として活躍した。そうした観点から言えば、学習と行動という心理学の基礎分野で常に日本の研究をリードしてきたともいえよう。

佐藤さんの研究の特徴は、概念的な分類の巧みさと、実験や分析のアイデアの奇抜さにある。彼は「分類学派」を自称し、心理的・行動的現象の行動分析学からの分類、ならびに行動分析学自体の概念の再分類を積極的に試みることで、そこから立ち現れた新しい概念を手がかりに行動分析学の可能性を切り拓いていこうとした。それを可能にしたのは、佐藤さんが日ごろ実行していた、丹念に何度も論文を読むこと、それに基づいて徹底した推敲の末に論文を纏めること、そしてこうした丁寧な作業を孤独に繰り返すことであったと思う。

一方、実験や分析のアイデアの奇抜さは、孤独とは別の極にあった。彼の周囲にはいつも多くの若い学生や卒業生、研究者がいた。そして鯨飲馬食の末、その集まりが多くのアイデアを創り出していったように見える。「判心術」という本に結実するコスモブレインなる集団をはじめ、オペラントライフという新語を生み出した研究グループ、東銀座の一角の事務所で開催された環境衛生懇話会（のちに「環境と行動の会」と改称）と称する不思議な談話会、死の直前まで開いていたスキナーの「言語行動」の講読会に至るまで、「学問」や「文化」に関わるものはもとより、佐藤さんを囲むお酒の集いは、大学を越え、行動分析学を越え、実に多くの人々を巻き込んで開かれていた。そしてそこでの談論で生み出されたアイデアを単なる酒呑み話に終わらせず、実際に形にしていたのは佐藤さんであった。

こうした人々との広い交わりは、お父様譲りのものであったかもしれない。普段からもそうであったが、ことに大晦日から正月にかけての旧佐藤宅（現在新宮市立佐藤春夫記念館 <http://www.rifnet.or.jp/~haruokan/index.html>）には多くの学生や卒業生が集まり、夜を徹して飲み続けた経験を

持つ者は少なくない。ある種独特な彼の話法は、旺盛な読書量と、パズル、ゲーム、マジック、言葉遊びを楽しむことで鍛えられた機智とに支えられ、語り合う人々を魅了した。そのような陽気な部分がある半面、宴席から一人二人と消えていくと、実に寂しそうな表情を浮かべる佐藤さんでもあった。そういえば、「動物心理学研究」の編集規定からエスペラント語での寄稿をよしとする、学会創立者の父上である丘浅次郎からの伝統の一行が消えたことを、たしか佐藤さんは大変寂しがっていた。

佐藤さんの見渡してきた領域は、実に広い。詩句、小説にのめりこむかと思えば、論理学や離散数学にも関心を持っていた。人類学や考古学にも目を向けるし、ピアノを弾いたり作曲に打ち込んだりすることもあった。しかし行動分析学や心理学という「職業」以外に、最も関心を向けていたものを1つだけと聞かれば、私は迷わず言語、それも生き生きとした言語行動を挙げる。彼の業績を丹念に見ていくと、言語をめぐる諸問題に常に戻っていくことがよくわかる。彼には2000年以降、嘘、アイロニー、詩歌、言語理論について言及した論文がいくつかあるが、単著で最もよく読まれた「行動理論への招待」(大修館書店)も雑誌「言語」への連載が出発点となっていた。そう、言語行動こそは、おそらく彼の人生の中で最も高くそびえ立っていた壁であった。

なぜ言語行動だったのだろうか。今となってはくわしくお尋ねすることもできないが、行動分析家ならばだれもが抱く疑問—「私たち心理学者の任務は、心的概念や生理学的概念によって、ロボットの「心」の理解やその「行動」の設計をすることにあるのだろうか?」、これに答える鍵がヒトの言語行動の分析の先にあると確信したからではないかと思う。いうまでもなく、言語行動には私的事象、社会的行動、文化的随伴性といった、行動分析学がまだ到達していない、いくつもの対象が内包されているのである。

70代後半になってまで言語学の専門書から語学参考書までを隔てなく蒐集し、世界の諸言語の習得に挑戦しようとする佐藤さんへの、ニュージーランドから戻ってきた私のささやかなお土産は、一冊のマオリ語の絵辞書であった。「持っていないんだよ」とことのほか喜んでくださった、スペイン料理屋でワインを楽しむ佐藤さんが最後の姿となってしまった。どうか地上では実現しなかった学習理論家たちとの対談を、天上でゆるりとお酒とともに楽しまれんことを。

## 一期一会：恩師佐藤方哉の死を悼む

愛知大学文学部 浅野俊夫

2010年8月23日夕刻、東京の京王線新宿駅のホームで、星槎大学学長の佐藤方哉先生が酔客に押されて電車に巻き込まれ、帰らぬ人となってしまった。享年77歳であった。8月30日の葬儀には弟子代表として弔辞を読ませていただいたが、慶應義塾大学文学部心理学専攻に進級して以来47年間のつきあいであった。

先生は1998年3月に慶應義塾大学を65歳で定年退職されたが、しばらくどこにも所属されず国際行動分析学会の会長の職務に専念され、その任期が終わると1999年から2008年まで帝京大学の心理学教授を務められた。国際行動分析学会会長に就任された時、小生はちょうどカリフォルニア大サンディエゴ校 (UCSD) の Edmund Fantino の研究室で1年間ハトを使っての在外研究をしていたので、日本に帰国される途中の佐藤先生夫妻をサンディエゴ近郊の小生の自宅にお招きし、Fantino, Ben Williams, Epstein 達と一緒に就任祝いのパーティをさせていただいた事がほんの昨日のこのように思い出される。そのパーティには故 George S. Reynolds の夫人からも先生宛にお祝いの花束とカードが届いていた。皆、動物心理学、特にハトの学習行動では高名な研究者ばかりで大変たのしいひとときであった。

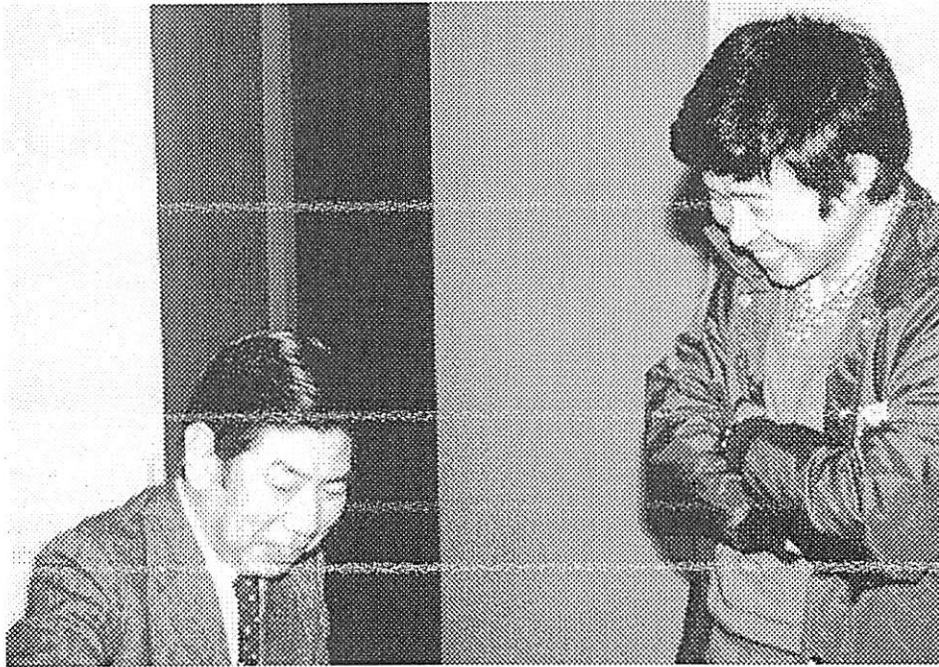
日本におけるハトのオペラント条件付けの研究は、佐藤先生の恩師、故小川隆先生によって慶應義塾大学で開始され、1953年に小川隆によって第17回日本心理学会大会で最初の報告「伝書鳩の弁別道具条件付け」が発表されているが、翌年には動物心理学会第67回例会で「伝書鳩の弁別学習について」が報告されている。その後、大西久夫、大日向達子、杉本助男といった慶應の諸先輩がハトの研究を報告しているが佐藤方哉の学会デビューは1957年（修士1年）日本心理学会第21回大会の小川隆・佐藤方哉「伝書鳩のオペラント弁別における色光刺激汎化」である。1959年には動物心理学会第19回大会で佐藤方哉の単独発表「伝書鳩のオペラント条件付け—潜時と反応率—」が行われ、連続強化、FI1分、消去の時の反応率を調べている。1960年（博士2年）には動物心理学年報

第10輯 43-54に佐藤方哉「デンショバトのオペラント条件付け—単一刺激に条件付けられた色光刺激汎化」が掲載され、これが佐藤方哉の最初の英文抄録付きフルテキストの論文だと思われる。

小生の卒業論文はヒトの GSR のレスポナント条件付けがテーマであり、指導教員は小川隆先生であったが、実際の指導はすべて佐藤先生で、結局その成果は佐藤先生との共著で2編の論文になった。当時、佐藤先生は自分でも精力的にハトの実験をしていて、モノクロメーターという高度な光学系の装置を使って単色光を発生し、それを弁別刺激にしてハトの弁別訓練をしていたのだが、VI強化スケジュール用のコントローラーが当時の日本にはなく、暗い中でストップウォッチを片手に、刺激を切り替えたり、給餌装置を駆動したりするのは全部手動で、夏は汗だくで大変だったとおっしゃっていた。その頃は動物実験の大変さを人ごとのように聞いていたが、1968年に犬山の京都大学霊長類研究所心理部門の助手として採用されたため、小生もその後19年間サルやチンパン

ジーの実験をすることになってしまった。はじめは、サルにレバーを押させることもできず、東京の佐藤先生の自宅の書庫に飛び込んで Ferster & Skinner の『Schedules of reinforcement』をむさぼり読み、体重統制による動機付け操作をきちんとすることと逐次接近法による反応形成(シェーピング)というテクニックがあることを知った。それをサルに適用してみたら簡単にレバー押し訓練ができてしまったことをきっかけに Skinner の著書を直接自分で読むようになり、佐藤先生と行動理論について議論ができるようになった。

帝京大学を定年退職された後は通信制大学の星槎大学共生科学部教授に就任され、翌2009年には学長職も兼務され、科学の様々な分野が協力して多様な人々が楽しく生き生きと暮らせる社会を作ろうというプロジェクトを計画中であったと聞く。まさに、Skinner が描いた Walden Two の理想郷にまさるとも劣らない現実の街作りを構想されていたのかもしれない。75歳を超える後期高齢者になってもなお夢を持ち、それに向かって前のめりのまま亡くなられた恩師の姿を見て、自分も夢途上で死ぬような生き甲斐のある大きな夢を探さなくてはと思う今日この頃である。



在りし日の佐藤方哉（左）と筆者（右）

## 主要著書および論文目録

### 著書・編著書

- 判心術 コスモブレイン(メンバー：浅野俊夫・神尾昭雄・菅野衷・倉科満夫・馬島壮治・宮清・佐藤方哉・菅村敬二郎・高橋常喜・寺田信之介) (著) けいせい 1973年。
- 行動理論への招待 佐藤方哉 (著) 大修館書店 1976年。
- 現代基礎心理学6—学習2：その展開— 佐藤方哉 (編) 東京大学出版会 1983年。
- ことばの獲得—言語行動の基礎と臨床— 山口薫・佐藤方哉 (共編) 川島書店 1983年。
- 行動心理ハンドブック 小川隆 (監修) 杉本助男・佐藤方哉・河嶋孝 (共編) 培風館 1989年。
- Behavior Analysis of Language and Cognition S. C. Hayes, L. J. Hayes, M. Sato, & K. Ono (Eds.) Context Press 1994年。
- 行動分析学入門 杉山尚子・島宗理・佐藤方哉・リチャード・W. マロット・マリア・E. マロット (共著) 産業図書 1998年。

### 訳書

- ことばの獲得—発達心理言語学入門— D. マクニール (著) 佐藤方哉・松島恵子・神尾昭雄 (共訳) 大修館書店 1972年。
- 言語の生物学的基礎 E. H. レネバーグ (著) 佐藤方哉・神尾昭雄 (共訳) 大修館書店 1974年。

### 詩集・句集

- 間歇詩集 笹山登 (著：筆名) 新風舎 2007年 (加筆修正版 文芸社 2009年)。
- のんせんす句集 河馬の馬鹿 左党放屁 (著：筆名) 新風舎 2008年 (加筆修正版 文芸社 2009年)。

### 音楽 CD (木下雅夫名)

- 『深く愛したら』, 『春の日』, 『トラララ』, 『童謡組曲／十二ヶ月の子守唄』。





## Masaya Sato

1932–2010

BY DICK MALOTT

MABA/ABA/ABAI was and is full of dream chasers, people who dedicate much of their lives to the pursuit of lofty but elusive goals. Dream chasers are heroes. But now ABAI has one less dream chaser, with the death of Sato Sensei on August 23, 2010. Masaya was 77 years old and still hard at work in pursuit of an understanding of humankind through behavior analysis and in pursuit of the international dissemination of behavior analysis.

It all started years ago when a plane from Boston's Ralph Gerbrands was flying over Tokyo, and two boxes fell out of the cargo bay to drift down through the clouds. The gods must be crazy. One box, the pigeon Skinner box, fell into the outstretched hands of young Masaya Sato standing in the perception-research lab of Professor Takashi Ogawa at Keio University. The other, a rat Skinner box, fell into the hands of Yagi at the University of Tokyo. But the gods were not crazy; they knew that few things are more reinforcing than tossing a pigeon in a Skinner box, connecting a Gerbrands cumulative recorder to it, and sitting back to listen to and see those key pecks accumulate (and oh yes, timing each of the intervals of the VI schedule with a stop watch while reading the list of intervals in his notebook; and oh yes #2 young Masaya only had a traditional event recorder at that time—maybe not quite as idyllic as I'd like to think). None-the-less, the young Masaya was hooked and, of course, did

his dissertation on stimulus control with that pigeon in one of those magic boxes. Thus, under Ogawa's tutelage, began a major component of the experimental analysis of behavior in Japan.

And Masaya continued to explore one of the great features of the Skinner box, its function as a microscope for examining both simple and complex behavioral processes, when he studied delayed matching-to-sample and also problem-solving in pigeons.

And Masaya began to explore another great feature of the Skinner box, its role as a model for experimental research in the human-operant lab, where he studied self-control and the type A behavior pattern as well as in a more generalized lab setting where he studied observational learning (modeling) in young children.

And Masaya began to explore still another great feature of the Skinner box, its role as the foundation for theoretical extrapolation, when he studied instinctive behavior, motivation and emotion, language and cognition, conflict, awareness, self-management of diabetes, asthma, the mand in haiku poetry, and Buddhism. Thus Masaya's breadth of interest illustrates one of the great features of behavior analysis—it provides us a coherent intellectual, social, and spiritual worldview.

Over the years, Masaya read several talks at ABA wherein he presented a behavior analysis of Buddhism. And





I'd observed him frequently giving alms at Buddhist and Shinto temples. So I asked this scientist/theoretician if he was a Buddhist; he paused for a minute, as he always did, and then said, "I don't know."

The younger Masaya caught the Skinner box, and it caught him. And in 1979, the older Masaya was one of the first members of ABA, attending every annual conference thereafter. But he didn't attend alone; instead, he was always with a coterie of Japanese behavior analysts, both experienced researcher-teachers and fledgling grad students, always encouraging and supporting Japan's participation in behavior analysis. In 1984 at ABA in Nashville, a beautiful young woman, Naoko Sugiyama, was in the grad-student section of that coterie. And two years later, there appeared a photo of Masaya and Naoko, elegant in their traditional kimonos—married.

In 1998, Masaya was the first and, so far, the only ABA/SABA president not from the States. In that role, he made major contributions in helping ABA/SABA bring behavior analysis to the entire world and not just leave it confined to the land of Skinner. He established ABAI's biannual international conference, always to be held outside the States. He got a permanent position for an international representative added to the ABAI Council. And he created a SABA fund for international grants. He was also co-chair of ABA's International Committee. And Masaya was one of the founders of Japanese ABA, its president from 1985 to 1990 and executive director from 1983 to 1984, and 1991 to 2006.

And like Skinner, Keller, Bijou, and so many others before him, a still older Sato-san was required to retire from Keio at the young age of 65, as is still the custom in Japan but fortunately no longer required in the States. And like Skinner, Keller, Bijou, and so many other of our dream chasers, retirement did not stop Masaya's pursuit of the dream; instead, he taught full-time at Teikyo University and then at the correspondence school Seisa University,

where he was president from 2009 to 2010.

And like many other behavior analysts, Masaya was also heavily involved in the arts. He came from ten generations of physicians/writers/poets. His father was the famous author/poet Haruo Sato. So Masaya set some of his father's words to music that he, himself, composed. He has four CDs of his own work available at <http://www.Amazon.co.jp> under his pen name Masao Kinoshita (another CD will be released posthumously). Much of his music is of the 1940's Edit Piaf sultry style; and really good; but he also has a CD of songs he composed for children, Spring Day. In addition, Masaya wrote his own poetry and published under yet another pen name, Kanketsu Shishu. Isn't that cool.

The beautiful young grad student in the kimono has gone on to become a major figure in behavior analysis, working with and independently of Masaya, training students, sending them to the States for more training, facilitating their attending ABA, expanding behavior analysis and pioneering OBM in Japan and throughout the world (she wrote *Introduction to Behavior Analysis*, which has sold 44,000 copies). Naoko initiated J-ABA's paying the considerable expense of two Japanese students attending ABA in the States every year since 2002, an impressively effective use of donor funds, as it doesn't merely reduce the costs of students attending ABAI but, instead, allows students to attend who otherwise might not be able to. And she's implemented a program where Japanese authors at the ABAI Expo donate their books to Japanese students who started studying behavior analysis in the States with no knowledge of behavior analysis in Japan. Furthermore, Naoko and Masaya have independently been generous donors to SABA's international fund and SABA's student fund. And she served as the liaison from J-ABA on the 2001 ABA delegation to China. Also she formed the Asian Association for Behavior Analysis. In her own way, Naoko continues the chase of the dream that Masaya started.

And yes, I weep as I write. ❖

2010.12.24

「故・佐藤方哉先生を偲ぶ会」出席者氏名（計 108 + 3名）

慶應義塾大学（46名）

浅野俊夫、植岡敬典、小野浩一、大村彰道、大森貴秀、岡 晴夫、奥原ジョージ、  
金子尚弘、河嶋 孝、栗林理恵、小清水妙子、小武海美津穂、小松英海、境 敦史、  
坂上貴之、佐藤仁美、実森正子、島宗 理、菅野理樹夫、関 晴子、曾我重司、千葉洋子、  
塚田剛志、寺田信之介、出口 光、中島定彦、中野泰志、浜田治予、樋口義治、平野敦子、  
広田すみれ、堀 耕治、増田直衛、水野圭郎、村上栄味子、望月 昭、森山哲美、  
矢田部菜穂子、山岸 健、山口耕一、山崎由美子、湯浅久美子、湯本典子、陸田健一郎、  
渡辺恵子、渡辺 茂、

帝京大学（23 + 3名）

池田政俊、石田一希、伊藤忠弘、井上智之、植村 進、大塚秀実、春日 喬、草山太一、  
白倉憲二、新谷和代、高田孝二、塚田静香、中村道子、中村由美子、野川由紀、馬場久志、  
廣江美恵、藤崎春代、南 隆男、毛利伊吹、望月 要、元永拓郎、横田裕子、  
（木原久美子、繁樹算男、早川友恵）

星槎大学（23名）

天野一哉、石川ふみ、井上 一、角木孝生、金子 肇、古藤泰弘、小中陽太郎、斎藤康浩、  
坂上寛一、佐々木貴枝子、佐々木孝、高橋常喜、千葉 佑、虎尾幹司、西永 堅、  
仲 久徳、中山康之、野口桂子、福島 紘、松本幸広、三田地真実、山口 薫、脇屋 充、

学会・ご親族・友人（16名）

安積 智、遠藤哲則、大河内浩人、木村 裕、小林栄助、鈴木清重、高橋百百子、  
竹内圭介、竹田長男、竹田有多子、中野良顕、原島 茂、 藤 健一、藤野英明、  
文沢元雄、眞邊一近、

スタッフ（星槎大学）

公平 博、津田昭彦、小楠康晴、田中 操、小林 学、佃 友彦、山本麻衣奈、吉川智子



# 『行動分析学研究』

## 佐藤方哉先生追悼特集のお知らせ

皆さまにはすでにご存知のことと思われませんが、昨夏、佐藤方哉先生が不慮の事故により逝去されました。佐藤先生は日本行動分析学会理事長（1985年-1990年）、国際行動分析学会会長（1998年-1999年）など、国内外の要職を歴任し、長年にわたり、行動分析学の普及・発展に尽力されました。

『行動分析学研究』では、次号（26巻1号、2011年7月末刊行予定）にて、佐藤先生の追悼特集を企画することになりました。佐藤先生が我が国の行動分析学や心理学に与えた影響を先生のご著書や論文から振り返り、考察するかたちの追悼文を学会内外から公募して掲載します。

佐藤先生はペンネームで詩集や音楽CDを創作されていたことからわかるように、人間に関する幅広い興味と深い洞察を持った心理学者でした。主要論文の一覧からも、研究テーマは刺激性制御から言語行動、パーソナリティから哲学まで展開し、それでいてその根っこのところは「随伴性」という概念でまとめられていたように思えます。佐藤先生への追悼を通して、これからの行動分析学の行く末を展望し、研究や実践がさらに発展するきっかけとなるような特集になればと思います。

追悼文では特定の論文や著書を取り上げていただき、「私はこの本の〇〇に～の影響を受けた」といった個人的なエピソードや、「〇〇という論文はこれから～という研究に発展していくに違いない」といった学問的な解説をご執筆下さい。

原稿は本誌換算で1～4ページ（A4判40字×30行/頁で、1.5～6ページ）とします。論文執筆には当学会の投稿規定に則ったひな形ファイルを使って下さい。論文の種別は「追悼文」（Memorial）とします。英文抄録は必要ありませんが、英文題目や著者・所属の英文表記はご記入下さい。その他の書式については当学会の「投稿規定」と「執筆の手びき」を参照して下さい。投稿時には「添付表」もご提出下さい。ご投稿いただいた追悼文は編集委員会で簡易査読をさせていただきます（書式や誤字脱字、倫理規定など）。

投稿締切りは2011年2月28日です。投稿や投稿についてのお問い合わせはメールで『行動分析学研究』編集事務局（[editor@j-aba.jp](mailto:editor@j-aba.jp)）までお願いします。

各種書類や書式は以下から閲覧/ダウンロードが可能です。

- ・ 投稿規定 <http://www.j-aba.jp/journal/contribution.html>
- ・ 執筆の手びき <http://www.j-aba.jp/journal/writer.html>
- ・ 本文のひな形 <http://www.j-aba.jp/journal/template.doc>
- ・ 添付表のひな形 <http://www.j-aba.jp/journal/attach.doc>
- ・ 投稿前のチェックリスト <http://www.j-aba.jp/journal/checklist.doc>
- ・ 佐藤方哉先生の主要業績一覧  
<http://www.workitout.jp/simamune/contents/MasayaSato20101029.pdf>